

自閉症スペクトラム障害型の“リアリティのなさ”に関する文献展望

木村 大樹

1. 問題

近年、発達障害の心理学的特徴として“リアリティのなさ”が取り上げられている。たとえば、河合（2013）は「大人の発達障害の心理療法において、夢の報告を聞いても、非常に長く、意味が感じられないものが語られることが多い。その場合に、細部のイメージの象徴性を丁寧に検討することで、全体像を浮かび上がらせようとしても無駄であろう。むしろ長い夢の中で、リアリティーが感じられる部分にだけ焦点を当てるのが大切なのである。」と述べている。また、田中（2013）も“発達障害の〈発達〉”の特徴は、「心的誕生」が果たされていないという意味での「未生性」にあり、その「心的誕生」は「多様性とリアリティー」を持つ体験世界への参入と深く関わっていると述べている。同じく田中（2010）は「張り子」という言葉で発達障害の人を描写しているが、この「張り子」は“リアリティのなさ”をイメージでとらえたものと言える。

このような発達障害の“リアリティのなさ”により、発達障害のクライアントとの心理療法において、実際には「転移」や「夢」があまりリアリティを持っていないにもかかわらず、心理療法の俎上に載せられることが起こり得る。そのような場合、河合（2013）が言うように治療者が「リアリティーが感じられる部分」に焦点を当てるためには、どの部分にリアリティがあつて、どの部分にはリアリティがないのかを見抜いておく必要がある。また、クライアントの語りの内容について深く理解しつつ、必要な場合にはそれがどの程度リアリティのあるものなのかも疑っていく必要がある。そして、もしリアリティがないとすれば、どの点でどのようにリアリティがないのかを見立てなければならない。そのためには、前提としてそもそも“リアリティのなさ”とは何か？といった問題を理解しておくこと必要がある。しかし、これまでのところ、“リアリティのなさ”についての心理学的理論を体系的にまとめた文献は見当たらない。このような状況では、治療者は“リアリティのなさ”を「どこか真に迫っていない」といった感覚のみに頼って見立てることになりかねない。このような場合、本来のクライアント自身の“リアリティのなさ”と、たとえば単に治療者がクライアントに共感できなかったり理解できないがために、クライアント本人はリアルに体験していても、治療者がリアリティを持って感じられないといった状況との混同が起こりうる。くわえて、「リアリティのなさ」という言葉は多様な意味を含んでいるため、本稿で扱う自閉症スペクトラム障害型（Autism Spectrum Disorders 型；以下 ASD 型とする。）の“リアリティのなさ”と離人症状などの他の心的状態との混同も起こりうる。本稿は、このような問題意識の下で、ASD 型の“リアリティのなさ”が心理学的にどのような側面から成り立っているのかを理論的に考察していくものである。

以降、第2節において、まずは本稿における“リアリティのなさ”をASD型の“リアリティのなさ”として定義する。次に、第3節において、ASD型の“リアリティのなさ”に関する先行研究をレビューする。さらに、第4節において、第3節でレビューした各理論の共通点と相違点について考察し、最終第5節にて、上記の主張の臨床的意義と限界を述べる。

2. 本稿におけるASD型の“リアリティのなさ”の定義

日本語の「リアリティ」という単語は「現実 reality」を指すとともに、「リアリティ」があるかないかと言う場合は「リアルさ realness」（あるいは「現実性」）も指す。この両者（「現実」そのものと「リアルさ」）は、関連していてわけられないため、本稿では、「現実」そのものと「リアルさ」の両方を区別せずに「リアリティ」という語を使う。また、「リアルである」とか「リアリティがある」という言葉は、潜在的にであれ、そもそもリアルでないことが前提とされている場合にしか使用しない。したがって、「リアリティ」が問題になる時には、常にその対となる“リアリティのなさ”が想定されているはずである。そこで、本稿でも“リアリティのなさ”について考察する。

日常語の「リアリティ」あるいは「現実（性）」という単語は通常、空想、夢、理想、記憶、といった内的な表象ではなく、実在するという意味で用いられる。たとえば、「リアルな夢だった」とか「結婚の話が現実的になる」という場合は、（まるで）虚構とか仮定の話ではない（みたいである）という意味で使われている。しかし、本稿で問題としているASD型の“リアリティのなさ”は「現実に近い」という意味ではない。なお、哲学では reality が「主観に非依存的な実在性」という意味で用いられるが、本稿は「主観」をむしろ問題にしている。

本稿で扱うASD型の“リアリティのなさ”は、主に発達障害（特に高機能の自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder：以下ASDと略記））と診断される人の語りに対して感じる「どこかリアリティが感じられない」という感覚と関連する。ただし、ASDの人やASD傾向のある人は、自ら「リアリティが感じられない」と訴えることはほとんどなく、“リアリティのなさ”を感じるのは治療者の方である。彼らは、数値の大きさや感覚的インパクトなどに対してはリアリティを感じているからである。たとえば、畑中（2010）の報告しているケースの老年男性は、心理療法の初期の段階で語っている内容にはリアリティがなく、来談して治療者と話すという行為がリアリティを持っていたと考えられる。田中（2013）は〈未生性〉の問題を抱えるクライアントの初期段階の面接の特徴の一つとして、『葛藤』や『罪悪感』といった心理療法になじみの深いテーマがもし彼らの口から語られたとしても、よくよく聴いてみると、どこか辻褄が合わなかったり、全てが借り物の言葉で語られているようだったり、彼らの語りや言葉が自らの実感に根差しているとは思えず、（誤解を恐れずに書くと）こちらにどこか馬鹿馬鹿しいと思わないではいられない何かを感じさせることさえある。」と書いているが、この感覚がまさにASD型の“リアリティのなさ”に対する治療者側の感覚である。なお、臨床的にはASDとは言い切れないがASD的特徴を持つ人も含めたスペクトラム全体に共通する心理学的特徴を把握することが重要であると考えられるため、本稿における“リアリティのなさ”もASD的特徴として捉える。

まず、「離人症 (depersonalization)」や「現実感喪失 (derealization)」などの「離隔 (detachment)」に分類される (Holmes, Brown, Mansell, Fearon, Hunter, Frasquilho, & Oakley, 2005) 心理状態との異同が問題になるであろう。しかし、Varga (2012) は「非現実体験を伝えてくる離人症患者

の報告は、前意図的な背景の変容について、つまり世界との関係性の変容について語っているものとして理解されなければならない。その変容が今度は、何かがあるということはということなのかという感覚をわれわれに与えてくれる基本的なリアルさの感覚を減してしまうのである。」と述べている。つまり、離隔における非現実感¹はむしろ「世界との関係性の変容」の表れであり、新しいリアリティを模索する段階として、いま現実だと思っているリアリティをいったん相対化する試みと考えられる。たとえば、柴山（2007）が報告している解離的な女性は「現実はいっぱいある世界のひとつ。夢や現実、過去、空想が並列関係にある。」と語っているが、これは相対化を主観的に語った語りであると考えられる。また、外傷体験のある人に解離がみられるのはよく知られている。野間（2012）は、外傷体験は他者から知られず、外相体験者自身も認めたくない出来事であるため、体験の「実感」から遠ざかろうとした結果、解離が起きるのだと説明している。そしてなによりも、離隔は「現実感の欠如 lack of feeling of reality」ではなく「非現実の感覚 feeling of unreality」であり、だからこそ離隔を持つ人は、たいていそれを不快なものとして訴える。このように、離隔とは一度確立したリアリティを相対化したり、そこから遠ざかったりする試みであると理解できる¹。これに対して本稿で扱う ASD 型の“リアリティのなさ”はもともとあったリアリティが後天的に変化したわけではなく、したがって本人が訴えることはほとんどない。

「偽りの自己（Winnicott, 1960）」や「かのような人格（Deutsch, 1965）」といった概念も、人格の「リアルではない」部分が前面に出ているという意味で、本稿で問題とする“リアリティのなさ”という概念と類似している。“重ね着症候群（衣笠, 2004）”という概念からもわかるとおり、背景に ASD などの発達の偏りを持つ人もまた、偽物の衣を着ていると言える。しかし、たとえば「偽りの自己」の覆いの下には「本当の自己」が隠されているといったように、本態が想定されているという点で、本稿で問題としている ASD 型の“リアリティのなさ”とは異なる。こうした「本態があるかどうか」という区別を踏まえると、本稿で扱う“リアリティのなさ”は、そもそもの“リアリティのなさ”といった形容がふさわしい。

クライアントにとっての現実と、「共有現実」や「社会的に構成された現実」や「客観的現実」があまりにも乖離しているときも、治療者はクライアントの語る内容に対して“リアリティのなさ”のような感覚を感じる。しかし、この場合は「リアリティがない」のではなく、クライアントにとっての現実と治療者にとっての現実（あるいは「共有現実」）が異なるだけであり、“リアリティのなさ”に含めるべきではない（この点は、次節で検討する）。

ここで留意しておくべきことは、「ASD である人にはリアリティがない」というのは、外側から見た記述であるということである。松下（2011）は、「離人感を『リアリティの欠落』とする見方は、万人共通のリアリティを盲目的に信頼する世界から見た早合点」とあり、離人感には離人感のリアリティがあるとしている。同様に、本稿で問題にする ASD 型の“リアリティのなさ”も、リアリティのある世界を前提にした形容であり、“リアリティのなさ”を生きている人には、その人なりのリアリティの質があると考えるべきである。

以上の議論を踏まえ、ASD 型の“リアリティのなさ”をひとまず「ASD 児・者に特徴的であり、多くの場合本人が訴えるのではなく他者から「嘘っぽい」「借り物のよう」と感じられ、離隔のように後天的になるものではなく、本態が隠されているために感じられるわけでもない、相対的な現実感のなさ」と定義する。

3. “リアリティのなさ”に関する先行研究

前節ではASD型の“リアリティのなさ”が何を指すのかについて、その臨床的特徴を定義した。本節では、“リアリティのなさ”に関する先行研究を概観し、そのなかで本稿で問題とするASD型の“リアリティのなさ”に援用できると考えられる三つの理論を紹介する。

感覚心理学の分野では、バーチャル・リアリティ（以下VRと略記）の構築の文脈で、リアリティが論じられている。VRはそもそも「実質的にはほとんど現実」というほどの意味であり、人がリアルであると感じるために必要な本質的感觉を抽出する試みであると考えられる。VRが完全に成立するためには、①人間にとって自然な3次元空間を構成しており、②人間がその中で、環境との実時間の相互作用をしながら自由に行動でき、③その環境と使用している人間とがシームレスになっていて環境に入り込んだ状態が作られているということ、という三要素が必要とされている（日本バーチャルリアリティ学会, 2011）。しかし、ASDを抱える人はこのような三要素は当然体験していると考えられる。これはVRのリアルさの必要条件はあくまで「感覚」のみの抽出であって、リアリティはこの「感覚」のみで成り立っているわけではないためであろう。

精神分析では、リアリティは内的現実 internal reality と外的現実 external reality との対比で論じられてきた。Freud (1911) は内的空想と外界の知覚を仕分ける心的機能である「現実検討」という概念を導入した。メンタライゼーション理論においても (Fonagy & Target, 1996; Target & Fonagy, 1996), 心的現実が外的現実と同様にリアルである「心的等価モード」と、心的現実が外的現実から分離している「ごっこモード」から、それらが統合されメンタライジング・モードへ至る発達の道筋を論じている。関係精神分析の理論では、リアリティは治療者が提供したり (岡野, 2002), クライアントと治療者の間で作り上げていったりするものというニュアンスが強調されており (Cassimatis, 2000), 客観的な唯一の現実が存在するという素朴な立場はなくなった。しかし重要なのは、いずれにせよ上記の文脈では、「リアリティがない」「リアリティが希薄である」という語は、外的現実（あるいは治療者の現実）とクライアントの内的現実との乖離を指して用いられるという点である。ただし、「心的現実」という概念は内的現実特別な地位を与えるものであり、決して内的現実を軽視しているわけではない。第2節でも述べた通り、こういった外的現実と内的現実との乖離は、本質的には現実の相違であり、“リアリティのなさ”に含めるべきではない。

3.1 「外在性がリアルさをもたらす」理論

Goldman (2012) が「フロイトは『どのようなエネルギーや強制力が、心と現実の接触を駆り立てたり制御したりするのだろうか。』と問う。ウィニコットは『どのようにして、ひとりの人間が現実感 (felt sense of reality) を獲得するのだろうか。』と思索する」と述べている通り、フロイトとそれ以降の精神分析理論では、基本的に「こころ」と「現実」を分けて考え、その乖離を問題としていたのに対して、例外的に Winnicott, D. W. は「こころ」が感じる現実感について考察している。

上記の Freud と Winnicott の橋渡しをしているのが Ferenczi, S. である。彼の理論 (1913) は、幼児がいかに痛みに耐えて万能感を捨て去り、現実感を獲得するののかという過程を描いている。すなわち、幼児は「無条件の万能感」から、「魔術的・幻覚的万能感の時期」、「魔術的身振りに助けられた万能感の時期」を経て、内界と外界を区別できるようになるという。続く著作 (Ferenczi, 1926) では、幼児が現実感を得るためには、自らのニーズを満たす対象が外的に知覚されたものであるこ

と、すなわち自らが万能感の及ばない対象に依存していることを認めることが必要であると述べている。彼の理論は Freud (1911) の理論を引き継ぐものであるが、内界と外界の区別が現実感という主体の感覚に寄与することを詳細に描いた点で、Freud の理論を一步先に進めたと言える。

Ferenzci の理論にはつきり言及していないものの、Winnicott の理論は Ferenzci の理論を引き継いでさらに深めたものであると言える。Winnicott (1971c/1979) は、対象が主体の万能的コントロールの領域内にある状態から、外的共有現実に含まれるリアルなものとして体験されるまでの過程を記述している。彼は、「対象と関係すること」と「対象を使用すること」を分けて考える。彼は、「その対象は、もしそれが使用されるのであれば、共有現実の部分であるという意味で、どうしてもリアルでなければならない。つまり、一群の投影であってはいけないのである。このことこそが、関係することと使用の間の大きな差異を強調するものだと思う。」と述べ、主体にとって対象が投影ではなく、外的に存在するものとなつてはじめて対象を使用できるのだと考える。そのためには、対象が主体の破壊から「生き残る」ことが必要であると彼は主張する。次の引用は、その過程を簡潔に表現したものである。

「やあ対象！」「私はあなたを破壊した。」「私はあなたを愛している。」「あなたは、私の破壊から生き残ったので、私にとって意味がある。」「私はあなたを愛しながら、(無意識的) 空想内ではいつもあなたを破壊し続けている。」ここで個人にとって空想が生じる。主体は今や生き残った対象を使用することができる。・・・この状態は、情緒発達の早期段階において、備給された対象が現実に残ることを通してのみ、個人が到達できるものであるが、そういった対象は、その時点で、それがリアルであるために破壊されたり、破壊されたためにリアルになったりする過程にあるのである。(太字は原文)

このように、対象は主体の破壊から生き残ることで外的でリアルな存在となる。この過程を経て、心の「外側」ができあがると、それに対応して当然「内側」もできる。すなわち、心の外側と内側の区別、つまり境界をはっきりとするのである。この境界こそが外的世界の「リアリティ」を保証している。ちなみに、「現実での適応がよくなった」という時のように、「現実」を「心理療法の枠外」という意味でも用いることがあるが、この場合も境界が確立しているからこそ「外側」が「現実」となるのである。

Winnicott は「リアルさ」を必ずしも客観的物理的世界に実在するという意味で使っているのではない。というのも、彼は「躁的防衛 (Winnicott, 1958)」や「空想すること (Winnicott, 1971b)」といった概念を用いて、外的現実だけでなく内的現実がリアルであること(あるいはリアルでないこと)についても記述しているからである。また、Winnicott (1971a) の事例に出てくる患者は、「私は、ベッドの傍に天使が立っているなんて、本当は信じていませんでした。でも、私はいつも自分の手首にワシを鎖でつないでいました。」と語り、実際には天使の実在性を信じていないにもかかわらず、「彼女に確かな現実性をもって感じられていた。」という。逆に、目の前に起こっていることに現実感を持ってないこともある。外界に実在するかどうかではなく、対象が万能的コントロールの外側にあり、主体の攻撃から生き残り続ける存在であることが重要なのである。さらに Figueiredo (2006) は、対象がリアルであるためには、第三者の介入に基礎づけられた「公的な対

象」であることが基礎となるという。

「リアルな対象」は「それそのものとして」、かつ「他者にとって」経験されるものであり、それゆえ（たといそれが内的対象の一つであったとしても）「公的対象」なのである。要するに、リアルな対象は（たといそれが考えや欲望や空想にすぎないとしても）現実検討にされされて生き残ったものであり、万能的コントロールから独立したものである。内的にであれ、外的にであれ、第三者の介入が、主体が平凡な現実や自らの現実の感覚を獲得するための基礎であり、それによって現実検討が維持され得ると私は主張する。第三者の否認や拒絶は現実感の獲得を脅かすのである。（筆者訳）

上記の理論に沿って考えると、翻って“リアリティのなさ”とは対象の外在性、あるいは公共性のなさとして理解できる。

3.2 「象徴的秩序がリアリティを構成する」理論

一方 Lacan 派においては、心的現実がシニフィアンによって組織される様を記述している。Brémauda (2013) は Lacan, J. の「リアリティ *réalité*」の概念を、「主体にとってのリアリティとは、出発点ではなく、構築するものであり、リアリティを構成しているのは、象徴的秩序である。すなわち、[リアリティは]シニフィアンのように構造化されている。」とまとめている。このことを Finc (1995/2013) は、わかりやすく次のように説明している。

象徴的なものは、現実的なもの *the real* を抹消することで「リアリティ *reality*」をつくりだす。リアリティとは、言語によって名づけられ、それゆえに施行されたり話題にされたりすることができるようなものである。（中略）言語は物事を現実存在させる（物事を人間的リアリティの一部にする）。その物事は、記号化され、象徴化され、言葉へともたらされる以前には、いかなる現実存在も持たないものである。

同様のことを Žižek (1991/1995) は「じゅうぶん象徴化されたものだけが『存在する』のである」と簡潔に説明する。村上 (2008) は、極めて近いことを、Lacan 独特の用語を用いず現象学的に記述した上で、自閉症者の場合にはこの構造が創設されにくいのだとしている。このような言葉による囲い込みのおかげで、「現実」そのものには触れられなくなる代わりに、私たちが現実だと考えている世界が象徴的で多義的に、つまりリアルになるのである。

しかし、上記のように、リアリティを象徴性的秩序と考えるだけでは、“リアリティのなさ”を見立てる際にはあまり役に立たない。なぜなら、語りや夢などに象徴性があるかどうかは、白黒で判断できない微妙な問題であるからである。“リアリティのなさ”を見立てるためには、「象徴性」が「他者性」に支えられていることを理解することが重要である。斎藤 (2008) は、「ある空間がリアルであるということは、そこに一種の「他者性」が存在することを意味している。空間においては空間の広がり、時間においては時間の経過が、コミュニケーションにあつては関係性の契機

が、この種の他者性を担保するだろう。」と述べ、リアリティが他者性に担保されているというアイディアを明確に説明している。このような「他者性」は決して到達し得ないという意味で、上述の Lacan 理論における〈現実的なもの le réel〉²に対応する。Žižek (1991) は、世界がリアルであるための象徴性はこの〈現実的なもの〉によって確認されると述べる。「〈現実界〉はここでは、象徴化に抵抗する何かではなく、すなわち象徴的宇宙に統合することのできない無意味な残余ではなく、反対に、象徴的宇宙の最後の支えとなる。物が意味を持つためには、「記号」といって読むことができるような何か偶然的な〈現実界〉のかけらによって、その意味が確認されなければならない」。同様のことを Finc (1995/2013) はより厳密に説明している。彼は〈現実的なもの〉を(1)文字以前の〈現実的なもの (R₁)〉と(2)文字以後の〈現実的なもの (R₂)〉という二つの異なる水準に公準化したうえで、「象徴的なもの」は文字以降の〈現実的なもの (R₂)〉によって「生み出される」と述べている。この文字以降の〈現実的なもの (R₂)〉こそが象徴性を支えている他者性である。以上の理論に鑑みると、“リアリティのなさ”とは、象徴性のなさ、さらにはそれを支える他者性のなさとして理解できる。

3.3 「魂が現実を作り出す」理論

Jung 派ではそもそも内的・外的現実という対比自体を問い直す。「心的現実」は「客観的外的現実」という自然科学的な世界観によって初めて措定できるものである(河合, 1998a)。そうでなければ、「あるときは『内』の『現実』を見、あるときは『外』の『現実』を見るというように、『現実』はその時々で都合のいい側へと移しかえられ、『現実』とは『内』と『外』との天秤を釣り合わせるための『おもり』でしかなくなる恐れがある」と北口(1998)は指摘している。

Jung (1921/1987) は「魂は日々現実性を作り出す。この活動はファンタジーという表現でしか名付けることができない」と述べ、リアリティがファンタジーの働きによって「創り出されている」と考える。河合(1992)はこのことを英語の *realization* という語を考えればわかりやすいと説明する。「それは『実現』であると共に『認知』である。現実を認知することは何らかの実現が伴うのである」。それゆえ、「治療者は、彼[引用者中：クライエント]の認知が間違っている、と考えるのではなく、彼がそのような『現実』によってどのようなことを実現しようとしているのか、あるいは、このような苦悩を通じて、どのような現実を^{リアライズ}実現しようとしているのか、共に考えようという態度で接するのである」。したがって、「もしもファンタジーの働きがなかったら、われわれは全く連関のない離人症的な世界に住んでいることになるだろう。」と河合(1998b)は述べている。

以上の考えを、Giegerich (1994) は歴史的に考察している。彼は魂の変遷を「神話」段階、「金色下地」段階、「ブラックボックス」段階という各段階の変化として記述し、「ブラックボックス」の段階にいたってはじめて、「内」とい「外」という措定ができあがるという。歴史的変遷をたどることによって、今日私たちが「外的現実」と考えているものがいかにして出来上がってきたのかを見抜くことができる。このように考えると、「境界」などというものは人工的に創り出されたものであるとして相対化される。リアリティとは、そこにあるものではなく常に「アニマ」や「アニムス」の働きによって創り出されているものであることが重要なのである。したがって、“リアリティのなさ”とは世界が「アニマ」や「アニムス」といった魂の働きによって、創り出されたものとなっていないことを意味する。このように、上記のような「アニマ」と「アニムス」の働きなどといった

心理的プロセスを経ることによって、そしてそのプロセスを日々繰り返すことによって、われわれは現実を作り続けているのである。言い換えれば、「リアリティのなさ」とはクライアントが生きている「現実」が、魂によって創り出されたものとなっていないことと理解できる。

以上、本節ではこれまでのリアリティに関する文献のうち、ASD 型の「リアリティのなさ」に関連すると思われる理論を三つにまとめて紹介した。次節は、これらの三つの理論の相互の関係について考察する試論である。

4. 三つの理論の関係

3.1 で紹介した通り、Winnicott (1971c) は、対象が万能的コントロールの外に位置付けられることで対象が外的でリアルになると主張している。すなわち、対象が主体の投影の束ではなく「他者」であることによって対象がリアルになると言える。一方で、3.2 で紹介した Lacan 派の理論では、象徴性を支えるのは他者性であると言われている。この点で、「他者性」が対象の外在性のリアリティと象徴性によるリアリティを橋渡しする接点であると言える。ただし、このような対象の「他者性」が、象徴的秩序の支えとなる「他者性」とは同じものと考えていいのであろうか。臨床的には、対象の「他者性」と象徴的秩序の中に潜みそれを支える「他者性」は連動していることが多く、どちらか一方だけが成立しているような事態は考え難い。しかし、この二つの「他者性」がどういった点で共通しているのかは、今後検討される必要がある。

3.1 の Winnicott の理論においては、対象が万能的コントロールの外側にあること、すなわちこちらの外側と内側の境界があることが現実感を担保しているとされていた。一方で、3.3 の Giegerich (1994) の理論では、「アニマ」と「アニムス」の働きによって、クライアントが生きている「現実」が、創り出されたものであると理解される。両理論は、内—外という境界を心理学的に作り出すことがリアリティを担保しているという点で、類似している。ただし、Winnicott が対象関係を問題としており、Giegerich が歴史的観点を重視しているという点を取ってみても、両者の相違点は大きい。Winnicott の理論が、Jung 派から見てどう理解できるのかといった点が、今後検討されることが期待される。

さらに、3.2 の Lacan の理論においては、リアリティの象徴性を構成しているのはシニフィアンである。一方、3.3 の Jung の理論ではリアリティの象徴性はイメージを作り出す働き、すなわちファンタジーによって生み出されているとされる。たとえば、花が萎れて涙が出るのは、それがあらゆることを象徴し、あらゆる体験が重なるからである。花が花でしかない世界にはリアリティはないだろう。このような体験には「言葉による」象徴性が関与していると考えた必然性はないと考えられる。両理論には象徴性という類似点もあるが、シニフィアンが一次的か、イメージが一次的かという差異が認められる。

以上、本節では三つの理論の大雑把な比較を試みたが、学派間の理論の比較は非常に大きなテーマであり、今後の詳しい検討が求められる。

5. 臨床的意義と限界

前節までで、「リアリティのなさ」を外在性（あるいは公共性）のなさとして理解する理論、象徴的秩序のなさとして理解する理論、魂の働きによって創り出されたものとなっていないと理解する

理論を紹介した。最終節では、本稿が含む臨床的意義と限界について検討する。

外在性、象徴性、魂の創造性といった理論はすでに十分に紹介されている。しかし、ASD 型の“リアリティのなさ”とどのように関係してくるのかについて、まとめた点に本稿の意義がある。このように“リアリティのなさ”を理論的に見立てることができれば、クライアント自身や治療者の「迫真性」といった感覚のみに頼る必要がなくなる。たとえば、どこかリアリティを感じられない場合に、「クライアントの本態は隠されているのではないか？」といった可能性や、「治療者はクライアントに共感できていないのではないか？」といった可能性を考慮するとともに、「クライアントにとって治療者は外在しているか？」「クライアントが語る現実とは主体による象徴的秩序によって構成されているのか？（それを担保する他者性はあるか？）」「クライアント語る現実とは魂の働きによって創り出されたものと理解できるか？」という視点を持つことで、クライアント理解を深めることができる。

一方、本稿には課題も残されている。第2節において、ASD 型の“リアリティのなさ”を離隔と区別したが、野間（2012）は「広汎性発達障害」を「コントラ・フェストゥム」の病理の一つとして解離などと一緒に羅列しており、本稿の“リアリティのなさ”を解離と区別できる独立した状態として考えるべきかどうかは、議論の余地がある。また、人間学派と呼ばれる Minkovski, E. や Blankenburg, W. もリアリティのなさについて考察しているが（Varga, 2012）、こういった理論は基本的に統合失調症の体験世界を理解することを目的としているため、今回は彼らの知見は含めなかった。しかし、こういった離隔や統合失調症のリアリティのなさの知見も ASD 型の“リアリティのなさ”を理解する上でも役立つであろう。今後、ASD 型の“リアリティのなさ”と 離隔・統合失調症との共通点と相違点について考察する研究が期待される。

さらに、本稿で取り上げた“リアリティのなさ”に関するは三つの理論自体、“リアリティのなさ”を構成するいくつかの構成要素のうちの三側面に過ぎない。たとえば既述の VR が提供する感覚的リアリティから、「感覚の統合性」「意識の清明さ」「経験の連続性」「世界の親近性」まで、他にもリアリティを構成するのに必要な要素はいくつも考えられる。くわえて、第4節で試みた三つの理論の比較は、試論の段階で終えられている。今後、本稿で取り上げなかったリアリティに関する理論と本稿で取り上げた三つの理論の関係や、本稿で取り上げた三つの理論の相互関係について、その思想的ルーツに返りながら検討することが必要である。

註

1：ただし、離隔は、病理的ではない一時的体験から、いわゆる「離人神経症」と呼ばれる単症状の病理、脳外傷などによる器質因による状態、精神病に付随する状態まで、多岐にわたるため、ひとくくりに論じることはできない。

2：〈現実界〉とも訳される

謝辞

本稿の執筆にあたりご指導いただきました、京都大学大学院教育学研究科 田中康裕准教授に深く感謝申し上げます。

文献

- Brémauda, N. (2013). Introduction au concept de réalité chez Lacan. *L'Évolution Psychiatrique*, **78**(3), 538-548.
- Cassimatis, E. G. (2000). Reality. *Journal of American Academy of Psychoanalysis*, **28**, 717-725.
- Deutsch, H. (1965). Some Forms of Emotional Disturbances and Their Relationship to Schizophrenia. In Deutsch, H. (1965). *Neuroses and Character Types: Clinical Psychoanalytic Studies*. New York: International Universities Press. pp. 181-262.
- Ferenczi, S. (1913). Stages in the development of the sense of reality. In E. Jones, Tras. (2002). *First contributions to psycho-analysis*. Karnac.
- Ferenczi, S. (1926). The problem of acceptance of unpleasant ideas: Advances in knowledge of the sense of reality. *International Journal of Psycho-Analysis*, **7**, 312-323.
- Figueiredo, L. C. (2006). Sense of reality, reality testing and reality processing in borderline patients. *International Journal of Psychoanalysis*, **87**, 769-787.
- Fink, B. (1995). *The Lacanian subject: between language and jouissance*. Princeton University Press. 村上靖彦 (監訳) 小倉拓也・塩飽耕規・渋谷亮 (訳) (2013). 後期ラカン入門——ラカンの主体について. 人文書院.
- Fonagy, P. & Target, M. (1996). Playing with reality: I. Theory of Mind and the normal development of psychic reality. *International Journal of Psycho-Analysis*, **77**, 217-233.
- Freud, S. (1911). Formulierungen über die zwei Prinzipien des psychischen Geschehens. 高田珠樹 (訳) (2009). 心的生起の二原理に関する定式 In フロイト全集 11 卷——ダ・ヴィンチの想い出, 症例「シュレーバー」, 1910-11 年. 岩波書店.
- Giegerich, W. (1994). *Animus-Psychologie*. Frankfurt u. a. (Peter Lang).
- Goldman, D. (2012). Weaving with the world: Winnicott's re-imaging of reality. *The Psychoanalytic Quarterly*, **81**(1), 1-23.
- 畑中千紘 (2010). 大人の発達障害の事例の検討——「影」に隠された「空白」の世界. 河合俊雄 (編) 発達障害への心理療法的アプローチ. 創元社, pp. 105-130.
- Holmes, E. A., Brown, R. J., Mansell, W., Fearon, R. P., Hunter, E. C. N., Frاسquilho, F., & Oakley, D. A. (2005). Are there two qualitatively distinct forms of dissociation? A review and some clinical implications. *Clinical Psychology Review*, **25**, 1-23.
- Jung, C. G. (1921). *Psychologische Typen*. Rascher. 林道義 (訳) (1987). タイプ論. みすず書房.
- 河合隼雄 (1992). 心理療法序説. 岩波書店.
- 河合俊雄 (1998a). 概念の心理療法——物語から弁証法へ(叢書・心理臨床の知). 日本評論社.
- 河合俊雄 (1998b). ユング——魂^{リアリティー}の現実性. 講談社.
- 河合俊雄 (編著) (2013). ユング派心理療法. ミネルヴァ書房.
- 衣笠 隆幸 (2004). 境界性パーソナリティ障害と発達障害——重ね着症候群について. 精神科治療学, **19**(6), 693-699.
- 北口雄一 (1998). 臨床心理学における「現実」についての一考察——阿部公房『箱男』と, W.ゲーゲリッヒ『アニムスー心理学』を手がかりに. 京都大学教育学部紀要, **44**, 278-290.

- 松下姫歌 (2011). 離人感というリアリティ——離人症論の再検討. 心理臨床学研究, **29**(4), 504-512.
- 村上靖彦 (2008). 自閉症の現象学. 勁草書房.
- 日本バーチャルリアリティ学会 (編) (2011). バーチャルリアリティ学. 日本バーチャルリアリティ学会.
- 野間俊一 (2012). 身体の時間——「今」を生きるための精神病理学. 筑摩書房.
- 岡野憲一郎 (2002). 中立性と現実 (新しい精神分析理論 2). 岩崎学術出版社.
- 斎藤環 (2008). ひきこもり青年たちはなぜ、仮想現実逃避に逃げ込まないのか?. 加納寛子 (編) 現代のエスプリ 492 ネットジェネレーション——バーチャル空間で起こるリアルな問題. 至文堂, pp. 140-148.
- 柴山雅俊 (2007). 解離性障害——「うしろに誰かいる」の精神病理. 筑摩書房.
- 田中康裕 (2010). 大人の発達障害への心理療法的アプローチ——発達障害は張り子の羊の夢を見るか?. 河合俊雄 (編) 発達障害への心理療法的アプローチ. 創元社, pp. 80-104.
- 田中康裕 (2013). 未だ生まれざる者への心理療法——大人の発達障害における症状とイメージ. 河合俊雄 (編) 大人の発達障害の見立てと心理療法. 創元社, pp. 21-41.
- Target, M. & Fonagy, P. (1996). Playing with reality: II. The development of psychic reality from a theoretical perspective. *International Journal of Psycho-Analysis*, **77**, 459-479.
- Varga, S. (2012). Depersonalization and the sense of realness. *Philosophy, Psychiatry, & Psychology*, **19**(2), 103-113.
- Winnicott, D. W. (1958). Manic defense. In Winnicott, D. W. *Collected papers: through paediatrics to psycho-analysis*. London: Tavistock Publications. 北山修 (監訳) (2005). 小児医学から精神分析へ——ウィニコット臨床論文集. 岩崎学術出版社.
- Winnicott, D. W. (1965). Ego distortion in terms of true and false self. In Winnicott, D. W. *The maturational processes and the facilitating environment*. International Universities Press, Inc. 牛島定信 (訳) (1977). 情緒発達の精神分析理論——自我の芽ばえと母なるもの. 岩崎学術出版社.
- Winnicott, D. W. (1971a). Transitional objects and transitional phenomena. In Winnicott, D. W. *Playing and Reality*. New York: Basic Books. 橋本雅雄 (訳). (1979). 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版.
- Winnicott, D. W. (1971b). Dreaming, Fantasying, and Living: A Case-history describing a Primary Dissociation In Winnicott, D. W. *Playing and Reality*. New York: Basic Books. 橋本雅雄 (訳). (1979). 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版.
- Winnicott, D. W. (1971c). The use of an object and relating through cross identifications. In Winnicott, D. W. *Playing and Reality*. New York: Basic Books. 橋本雅雄 (訳) (1979). 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版.
- Žižek, S. (1991). *Looking awry: an introduction to Jacques Lacan through popular culture*. An october book, MIT Press. 鈴木晶 (訳) (1995). 斜めから見る——大衆文化を通してラカン理論へ. 青土社.

(心理臨床学講座 博士後期課程 1 回生)

(受稿 2015 年 9 月 1 日、改稿 2015 年 11 月 4 日、受理 2015 年 12 月 24 日)

自閉症スペクトラム障害型の“リアリティのなさ”に関する文献展望

木村 大樹

本稿は、高機能の自閉スペクトラム症をはじめとした発達に偏りがある人の語りや夢に特徴的な“リアリティのなさ”に関するこれまでの理論をまとめることを目的とする。このタイプの“リアリティのなさ”は解離や「偽りの自己」などとは異なるものであり、他者から見た「うそっぽさ」などとして感じられる。先行研究を検討した結果、“リアリティのなさ”に関する理論は三つの系列に分類できた。すなわち（１）対象の外在性、あるいは公共性がないこと、（２）世界が象徴的秩序によって成りたっていないこと、さらにその象徴的秩序を支える他者性がないこと、（３）現実が魂の働きによって創造されたものとなっていないこと、である。“リアリティのなさ”を上記三系列から見立てることができれば、「迫真性があるかどうか」といった治療者の感覚だけでなく、理論的に見立てることが可能になるだろう。

Review of Autism Spectrum Disorder-type of “Lack of Reality”

KIMURA Daiki

This paper presents a literature review regarding the “lack of reality,” which is characteristic of narratives and dreams of individuals with high-functioning Autism Spectrum Disorder and other developmental issues. This type of “lack of reality” is different from either dissociative symptoms or “false self.” It is usually not felt by the subject him/herself, but felt by other people as if he/she were pretending. A literature review revealed that previous theories on “lack of reality” fall into three categories: “Lack of reality” means (1) that object is *not* external or public, (2) that subject’s reality is *not* constructed by symbolic order, and thus symbolic order is *not* supported by otherness, and (3) that reality is *not* created by soul. This review enables therapists to assess client’s “lack of reality” not only with the therapists’ naïve senses, but also from a theoretical basis.

キーワード： リアリティのなさ、自閉症スペクトラム障害（ASD）、文献展望

Keywords: lack of reality, Autism Spectrum Disorder(ASD), literature review